

---

# 1年3組 ソマリ先生！

ニグラム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

1年3組 ソマリ先生！

### 【Nコード】

N2257P

### 【作者名】

ニグラム

### 【あらすじ】

藍染との戦いを終えて現世に帰ってきた一護達。

しかし空座第一高校は十刃にエスパーダ乗っ取られていた？

一護「なん…だと…」

ソマリ先生「何をしているのですか？早く席に着きなさい」

みんながNo.7のことを思い出してくれると嬉しいです。

1月8日、朝（前書き）

はじめまして、ニグラムといいます。

初めての小説なんでかなり下手な文章だと思いますが、読んで下さると嬉しいかな…

あ、「エスパードって全員死んだよね？」っていうツッコミはなしでお願いします。

どうやって復活したかとか言う話は考えてません。

1月8日、朝

「…寒いな。」

空座第一高校への道を、オレンジ色の髪をした少年が走っている。

「少年」？そう、黒崎一護はまだ高校一年生。

この小説の時間設定は一応藍染様を倒した後、ということになっているが、それでも一護は一年生。連載は10年続いているらしいが、作品中の時間は一年も経っていないのである。

「一護、早くしないと遅れるぞ」

そう言いながら隣を走るのは朽木ルキア。いろいろあってやっぱり学校を続けることにしたらしい。

「ンなこと分かってる…オッス、チャド」

「一護か、おはよう」

大きな体の彼は茶渡泰虎。

「おはよー、黒崎くん！」

大きな胸の彼女は井上織姫。

「おはよう、黒崎」

…彼は石田。

「僕だけ扱いひどくないか!？」

…さて、学校に着いた。5人はそろって一年三組に向かう。

最初の頃のBLEACHを知らない人のために説明しておこうか。

5人はみんな同じクラス、一年三組である。そしてその担任は国語教師の越知美諭おちみさち。たまに教師とは思えない言動をとる、メガネをか

けた女性教師である。

思い出していたただけただろうか？

教室に着いた一護がドアに手をかける。

ガラガラ

「なん…だと…」

そこにはすでに教師が立っていた。

「嘘…だろ…」

その教師は女性ではなかった。

「ム…」

その教師はおそらく日本人ですらなかった。

「どうしたのですか、貴方達。早く席に着きなさい」

「きりーつ。れーい」

クラスメートの小島水色が号令をかける。

「この霊圧って…？」

織姫がルキアに小声で訪ねる。

「ああ、これはおそらく破面…」

「私はこの一年三組の担任です。とりあえずこれから始業式がありますから皆さん校庭に出るように。ほら、その5人も荷物を置いて外に出なさい」

「は、はい…」

黒人の教師（？）に促されて教室へ入る。

「オッス、一護！初日から遅刻かよ」

「アレは間に合ったうちに入るだろ。それより、なんで担任が変わってんだ？俺が休んでる間に何があった？」

真っ先に一護に話しかけたのは浅野啓吾。

「俺も知らねーよ。二学期まではなんもなかったのに、なあ水色？」

「うん、でもあんな服着た人はいっぱいいいるみたいだよ。僕さっき見かけたし」

一方こちらは…

「お、り、ひ、めー！」

「まだ、朝、だ！織姫、久しぶり」

織姫に襲いかかろうとする本庄千鶴に、彼女を殴って黙らせる有沢たつき。

「久しぶりだね、たつきちゃん。越知先生どうかしちやったのかな？」

「いや、終業式の時も普通だったぞ？そっぴや、他の先生も見てないな…」

「そうなんだ。越知先生元気だといいね」

「でもさっきのオッサン、なんかイヤな感じがしなかったか？」

「え？」

たつきは靈感が少し強い。破面の霊圧を感じとっていてもおかしくはない。

「織姫、たつきー校庭出るよー」

「あ、今行くよー」

ちなみに今話しかけたのは国枝鈴。

それではカメラを校庭にうつそうか。

1月8日、朝（後書き）

〽護廷十三隊 一番隊隊舎〽

雀部長次郎

「総隊長殿、紅茶をお淹れしました」

山本元柳斎

「ふむ、抹茶を頼もつかの」

雀部さん

「……分かりました」

山本総隊長

「読者諸君。儼は護廷十三隊の総隊長、山本元柳斎じゃ。

この小説は、素人の書いたもの故、下手すると檜佐木の連載より早く打ち切りになるやもしれん。

要は感想を書いて欲しいというだけの話じゃ。よろしく頼むぞ」

〽一番隊隊舎 給湯室〽

雀部さん

「一体いつになったら総隊長殿は西洋文化の良さに気づいて下さるのだろうか……」

〽再び隊長室〽

雀部さん

「総隊長殿、抹茶をお持ちしました」

山じい

「……………」

雀部さん

「総隊長殿？」

山じい

「……………」

雀部さん

「……眠っている……」



## 始業式（前書き）

今回ゾマリ先生は出てきません。  
話が全然進みません。  
すいません。

## 始業式

キーン…

『生徒諸君は早く並びなさい』

マイクを通して女性の声が校庭に響く。

「…コレも聞いたことねえ声だな」

「そうだな、一護」

「黒崎、これはどうなってるんだ？破面の霊圧がいくつも…」  
「チャドとは対照的に石田は慌てているようだ。」

「俺もわかんねーよ。始業式でなんかわかんじゃねーの？」

「そんな、相手は破面だぞ？しかもこんなに大勢…」

「俺と一護でなんとかなるやろ、なあ一護？」

「真子、お前まだいたのか」

「当たり前や。俺が織姫ちゃんをほっとくわけないやろ」

「…まあいいや。もし奴らが襲ってきたら石田とチャドはみんなを逃がしてくれ」

「分かった」

そうこうしている内に全員校庭にそろったようだ。

『これより、空座第一高校三学期始業式を始めます。一同、礼』

朝礼台に登場したのは厳格そうな老人。

「僕は、”校長”バラガン・ルイゼンバーン。

この空座第一高校は、<sup>エスパーダ</sup>儂ら十刃が占拠した。」

「なん…だと…」

ざわついているのは一護達だけではない。

「何だよエスパーダって」

「先生達はどうしちゃったの」

「ここに元々いた教師については知らん。ボスが身動き取れん以上、儂が指揮を執るというだけだ。異論はないな？」

校庭は静まり返っている。この威厳は前の校長にはなかったものだろう。

「それでは改めて始業式の挨拶だ。

新年明けましておめでとう、とこの国では言うそうだな。新たな年を迎えて君たちはいったい何を考えるのだろうか？

儂も正月に考えてみた。

初めての学校で生徒諸君と親しくなるためにはいったい何をすれば良いのか、そして生徒諸君をいったいどのようにしてこの学び舎で教育してゆけば良いのか。年の大きく離れた生徒諸君とはおそらく常識も異なるはず、しかも儂らはつい最近この現世……いやこの空座町に来たばかり、右も左も分からない状態で果たして教師など出来るのか……」

さすが”校長”話が長い。

「…高校三年生は最後の高校生活を存分に楽しんでくれたまえ。

君たちは、この学校に関して言えば儂らよりも先輩だ。これからよろしく頼むぞ。」

やっと終わったようだ。

『一同、礼。』

では、次に生徒会からだ』

朝礼台に登ってきたのは浅野みづ穂。啓吾の姉である。

「明けましておめでとう。みんな楽しい冬休みを過ごせたかしら？ 私からはこれだけ。今日は寒いしね」

彼女の挨拶は短いことに定評がある。

「今日は新しい副会長を紹介するわ」

登ってきた彼の姿を見て校庭はざわつく。  
破面の白い服、緑色の瞳、そして何より目立つのは左の頭を覆う仮面。

「な……」

一護は絶句した。

## 始業式（後書き）

〽 護廷十三隊 二番隊隊舎

砕蜂

「大前田、この小説に夜一様は出演なさるのだろうか？」

大前田希千代

「知りませんよ。」

「だいたいそんなに夜一さんのこと気にしてるのは隊長ぐらい……」

砕蜂

「今すぐに調べてこい。分かったな」

大前田希千代

「は、はい……」

砕蜂

「ああ、夜一様……」

## 浦原商店へ（前書き）

現在判明している十刃の役職

No・1

No・2 Ⅱ 校長

No・3

No・4

No・5

No・6

No・7 Ⅱ 担任

No・8

No・9

No・10

（十刃紹介コーナー）

セグンダ・エスパーダ

第二十刃

バラガン・ルイゼンバーン

虚圏の王、”大帝”バラガン・ルイゼンバーン。

もともとの虚夜宮の主であり、数多くの大虚を従えていた。

突然現れた藍染に「僕の刀を見てくれ。コイツをどう思う？」と言われ引いている間に部下を倒されてしまい、藍染の部下、十刃となる。

十刃となった後もアビラマ、クールホーン、キャリアス、ポウ、ジオⅡヴェガ、象の人と多くの従属官を従えている。

またもともと”大帝”だったためかなり偉そうに振る舞っている。

帰刃は「朽ちろ 髑髏大帝」  
アロガンテ

頭は髑髏と化し「あらゆるものを朽ちさせる程度の能力」を持つ。  
二番隊長長の正解をゼロ距離で食らっても死ななかったがハツチによつて「朽ちる手」を体内に送られ、果てる。

自分を欺いた藍染をいつか自らの手で倒すつもりでいたようだが、結局は藍染の捨て駒に過ぎなかった。

…心から「藍染様万歳！」なんて言えるのはゾマリくら…イヤ、なんでもないです。

## 浦原商店へ

「クアトロ・エスパーダ  
第四十刃、ウルキオラ・シファード」

「なんでデメーもいるんだよ!!」

一護の声が校庭に響く。

『その君、静かにしなさい』

マイクの声に注意される。

「ウルキオラ君、一護と知り合いなの？」

「まあ、ちよつとした知り合いだ」

お互いの命を懸けて戦った仲である。

「さつき会長が説明した通り、生徒会の副会長をやらせてもらう。

顔だけでも覚えてくれると嬉しい」

「あの仮面で忘れるなんて不可能だろ……」

全校生徒がそう思った。

「えと、生徒会からは以上よ」

『ではこれで始業式を終わりとする。各ホームルームに戻れ』

そして一年三組。

「では、私の自己紹介を。」

私は第七十刃、セフティマ・エスパーダゾマリ・ルルー。

この一年三組の担任を勤めさせてもらう。短い間だが皆、よろしく

「「よろしくお願いします」」

「今日の連絡は特にありません。」

早速明日から授業だからそのつもりで。以上です。気をつけて帰らないさい」



「…結局なんなんだ？」

さっぱり分からないといった顔で一護は言った。

「私にもまだよくわからん。とりあえず浦原の所に行ってみるか」とルキアがやってきて話しかける。

「せやな。キスケなら何か知つとるかもしれんな」

机に腰かけた平子も言う。

「じゃ、決まりだな。石田、俺ら今から浦原さんとこ行くんだけど、来るか？」

「いや、遠慮しておくよ。あんまり死神と絡むと父さんがうるさいからね」

「そうか。じゃまた明日な」

そして三人は教室を出た。

「おお、これはこれは平子殿、朽木殿、黒崎殿」

浦原商店の前で掃除をしていたテッサイさんが三人に気づいた。

「テッサイさん、今浦原さんいるか？」

「はい、店長なら店の中に」

「サンキュ」

そう言つて一護は店の中へ。

「あー！イチゴだー」

「おわっ！？」

店に入るなり飛びかかってきたのは水色のフードをかぶったぬいぐるみ。

「…って、りりんか」

「何よその言い方！」

「久しぶりですなあ、黒崎さんに朽木さん。そちらの方は？」

初対面の平子に話しかけるのは蔵人<sup>くらね</sup>。

「俺は平子真子や。一護、このぬいぐるみ達は何や？」

「俺達は改造魂魄。今はぬいぐるみに入れられているだけだ」  
そう返したのは之<sup>の</sup>芭。

「あ、黒崎サンに朽木サンに平子サン、どうしました？」

「キスケ、お前も妙なモン作つとるな…」

平子は半ば呆れたように言った。

改造魂魄は尸魂界では違法とされている。追放された浦原だからこそ出来ることなのだ。

一同は机を囲み、一護は浦原にエスパイダにのつとられた学校の様子を説明した。

話を聞いて浦原は言った。

「大丈夫ツスよ」

「…え？」

「藍染がいらないなら破面も十刃も特に害はないみたいです。そう  
そう、さっきウチに技術開発局から連絡が来ましたけどね…」

~~~~~

阿近「最近ソツチで破面反応が出てますけど、大丈夫ですか？」  
之芭「大丈夫だ、問題ない」

~~~~~

「イヤ、なんで之芭が答えてるんだよ」

「ちよつとアタシの手が離せなかったモンで…」

一護のツツコミに浦原が答える。

「ま、とにかく破面の先生に慣れてしまえばええってことやな」

「そういうことツス」

「あんがとな、キスケ。ほなまた来るわ」

「お気をつけて」

喜助に見送られながら浦原商店を出た三人。結局これからは破面と一緒に学校生活を送らないといけないらしい。

「じゃ、俺はここで」

「真子、また明日な」

平子は仮面の軍勢ヴァイザードの家へと帰っていった。

「…どうした、ルキア？」

不満そうなルキアに気づいた一護が話しかける。

「平子元隊長がいらっしゃるおかげで私の出番がほとんど無いので、ちよつとな」

「……なんかごめん」

浦原商店へ（後書き）

「護廷十三隊 三番隊隊舎」

吉良

「…藍染がいなければ破面に害はないんですか。へえ…」

「…ってことは、破面を倒しても本質的な解決にはなってなかった訳ですね。ははは…」

彼の所属する三番隊の隊花は「金盞花」  
その花言葉は「絶望」である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2257p/>

---

1年3組 ゾマリ先生！

2011年3月1日00時27分発行